

いの流水俳壇

間 浩太 選

「当季雑詠」

門火焚く彼の世に知己の増えゆける 竹崎 光子

(評) 古稀・喜寿と年齢を重ねることに、知人・友人と別離する悲しみに遭遇するのですが、この句のとおり彼の世の知己が、年々増えていくのは、誰も同感することです。

七月十三日、盂蘭盆会に入る夕方、先祖の精霊を家にお迎えするため、門前や戸口で焚く火を門火とも迎え火、魂迎えともいう。

お盆に祖先の精霊が家に帰ってくるのに迷わないように、家族が出て門火を焚くのは、奥ゆかしい風習・行事です。

最近では、門火を焚く家も減少しているのは淋しいことだと感じます。

西の空明るく照らす遠花火

森岡 照月

(評) 主に夏、全国各地で花火大会があり、テレビでも各所の花火大会が放映されています。

いの町も紙の博物館西の、仁淀川河原で花火大会が毎年行われ、多くの人が見物している。この句の作者、照月さんや私たちの住む是友地区ではこの句と同じで、西の方が明るく光ると、打ち上げ花火が五彩の美しい花を夏の夜空に咲かせ、是友地区からは地上の、見事な仕掛け花火は見ることはできませんが、打ち上げ花火は十分見えます。

この句は、見たまま聴いたままと詠まれて読者にも、遠花火の情景が伝わってきます。

花火は夏の一大イベントですので、これの俳句は非常に多いですが、この句のようにさらっとしたのも良いものだと感じます。

兄弟も健やかかなりし生身魂

小野川町子

(評) 盆の間に、父母・主人・仲人など子どもや目下のもものが、物をあげたり食物を整えて、食べてもらったりすることを生身魂という。室町時代から行われていたとのこと。

親のある者は魚(鯖が多い)を携えて行って食べてもらう。

生きている御魂(両親など)を拝み、その形を頒ち与えてもらうというのが、生身魂の本来であったという。

お中元の贈答なども、ここから起ったといわれる。

古里にふたりそろひで生身魂阿波野青畝の句である。

小野川さんの生身魂である兄・姉さんが健やかなのは、嬉しく幸せなことです。

夜振火の揺らすカンテラ水に舞う

筒井 一平

(評) 夏の夜、松明・カンテラ・電灯などを灯して川魚をとることで、燈明かりに照らし出された魚を金突などを用いて、突き刺すのが普通である。

闇に吹く涼しい川風に身をさらし、脚をとっぷり水につけての漁であるから、絶好の銷夏である。

また、闇の中ちらちらと川波を照らす、夜振火の景も面白い。最近では、夜振火を禁止されている箇所

も多くなつた。

「夜振の火かざせば水のさかのぼる」中村汀女の作。

「水に舞う」と言つたところが良いところですよ。

一平さんは、しばらく投句を休まれていました、今回、久しぶりに投句してくださいました。

これからは、投句を続けていただきたいと思います。

石田波郷の言葉ですが、『俳句が生まれるためには、不断に俳句を続けていなければならぬ』と言っています。

難しいことだと思えますが、「継続は力なり」も同じような意味ですね。

水一杯のんで出てゆく夏帽子 岡本とも子

半夏生家格遣せりレストラン 田薦恵美子

介護する手にはや秋を知る患者 竹崎たかひろ

水の雲揺れて咲き初む黄睡蓮 友草 水月

地に響き夜空に溶けて盆太鼓 大川 節弥

盆近し飯屋に並ぶ運送車 井上 郁子

送り火や翳す手見せて橋たまと 弘瀬うき子

何鳥か良く鳴く日なり風薫る 片岡 包女

鷹の目の乙女の気迫夏五輪 岡村 嘉夫

池の面水の動かぬ炎暑かな 伊藤 萩甫

騒めきの余韻しばらく夏祭り 津田 久美

ありたけのコンテナを付せ西瓜畑 川村 博子

梅雨明けや山家に余る寛水 松尾満津於

段畑は夏蝶の大好きな場所 間 浩太

投句先

社会教育課

いの町3597

893-2012

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月五日

催し物

第23回

ほのほの王国 もみじまつり開催

ほのほの王国もみじまつりは、子どもからお年寄りまで楽しめる催しで、吾北地区最大のイベントです。

美しい花が咲く中、町内の味自慢の店も多く出店します。

また、伝統芸能など多くの催し物がありますので、是非お越しください。

日時 11月11日(日)
10時~15時30分

*荒天の場合は、吾北中央公民館でイベントを行います。

場所 グリーン・パークほのほのお祭り広場(清水程野)

内容

しばてん踊り・吾北清流太鼓・歌謡ショー・キャラクタースhower・マジックショー・もち投げなど。

問い合わせ

ほのほの王国もみじまつり実行委員会事務局

(吾北総合支所産業課内)

☎ 867-2313

※ご注意：ペットの持ち込みはご遠慮ください。